

## 17.子ども食堂が予示・啓示する新しい社会の在り方・かたちと 子ども食堂が持つ潜在的な可能性

竹中陸人

### 1.なぜ子ども食堂は増加したか

近年、子ども食堂が急増している。その要因は日本社会の変化である。かつて日本は夫は仕事、妻は家事育児と役割分担されていた。さらに祖父母や親族が同じ屋根の下に住む複数世帯がデフォルトであった。また、近所付き合いも盛んで、自分らがいない間でも何かしら子どもの面倒を見てくれる環境が整っていた。しかし現在、日本の伝統的家族形態である夫は仕事、妻は家事育児の形態は崩れ、さらに夫婦共働き世帯や片親家庭という核家族化が進んでいる。そこで問題になるのが子どもの育児、教育の担い手がないということだ。かつて育児、教育に専念した母親は社会に出て子育てが出来なくなる。祖父母に頼ろうとも核家族化が進んでおり、同居または近所に住んでいない場合が増えている。近所付き合いも寂れてコミュニティは退化し、隣の家の人顔も知らないという環境が出来つつある。こうなると学校から帰ってきた子どもの居場所がなくなってしまう。帰ってきても誰もいなく、夜になっても両親が仕事なので一人で夕飯を食べる。近所付き合いもないので子ども同士で仲が良くても親が関わり合うことを避けてなかなか親が帰ってくるまで子どもを預かる、預けることをしなくなっている。子どもが家族団らんや人の温かみ、一人でご飯を食べることで栄養が偏ってきたりすることが問題化している。

そこで出てくるのが子ども食堂である。子ども食堂は無料または安価に子どもに食事を提供し、場所によっては学習支援や遊び場の提供などを定期的に行う施設である。これは国や市町村が行っているわけではなく、地域住民の好意から始まったいわゆる草の根から始まった活動である。しかしここで一つの疑問がおこる。なぜ繋がりが希薄な社会になっている今、お節介な大人達が再び子ども食堂という形で動き始めたのか。

### 2.子ども食堂が社会におよぼす効果

子ども食堂は育児、教育の担い手が不足している社会においてそれをカバーする効果を発揮する。まず子どもに食事を与えることが出来る。子ども食堂では子どもの食育や栄養のある食事を提供することを掲げて活動しているところが大多数を占める。家での食事では、どうしても子どもの好きなもの、残さず食べてくれるものを優先して作りがちである。その要因として食費を抑える、なるべくロスを出さないようにすればその分お金が浮く。また、母親がおいしい子どもに残されないようなご飯を作ることが良いとされている社会の目を気にしてという場合が考えられる。また、両親ともに共働きで、夕飯の時間に親が帰ってこない家庭で子どものみで食事を摂る場合、嫌いなものがあったとしても親の監視がないため残したり捨てたりと逃げ道がある。親が食事を作らず、子どもが食事を作り食べる場合には調理の際にけがなどの危険が生じたり栄養が偏ってしまったりする可能性が高い。そういう子どもが子ども食堂に来ることが出来たら栄養のある食事や調理に関する知識を得ることが出来る。

次に子どもが気軽に来ることが出来る居場所になる。例えば家族だと親の躰等のために居づらくなってしまう。私の幼少期の体験を例に出すと学校から帰ったら勉強しなくてはいけない、漫画を読んではいけない、ガム、ソフトキャンディ、飴、清涼飲料水の禁止、エ

ンタの神様、ガキの使いやあらへんで等のバラエティ番組、クレヨンしんちゃんの視聴禁止、毎晩 21 時就寝など、生活のあらゆるところで制限がかかる。学校には毎日出席することが良いとされるし先生の言うことを聞かなければいけない。これらが強い繋がりであるのに対し、子ども食堂良い意味での弱い繋がりである。かならず出席しなきゃいけないわけではなく、決まったボランティアスタッフがいるわけでもない。その空間は日常が強い繋がりによって構成されている特に義務教育中の子どもたちにとって居心地の良い居場所になる。これがあると子ども達のメンタルヘルスに良い結果をもたらすことが出来る。さらにそれにつながって子どもの自殺や不登校の解消、緩い繋がりだからこそ話すことが出来る子どもの本心から、その子の家庭環境が把握できる。それにより虐待などの通常踏み入ることが躊躇されるような解決の難しいプライベートな問題を把握、解決に向かうことが出来る。

子ども食堂がもたらす効果は子どもだけにとどまらない。子ども食堂にボランティアに伺った際になぜボランティアをやられているのかと質問したところ、子どもの喜んでる顔を見に来ているとか、やりがいを感じる、生きがいになっていると答えるスタッフが多い。つまり、子どもだけではなく、大人の居場所にもなっているのだ。子ども食堂が大人の居場所にもなっていることで、互いの情報を共有し合い、地域社会の強化につながる。地域社会の強化が進むと、子ども食堂の情報が地域中に触れて回ると同時に子ども食堂にも情報が入る。そうすると、助けがいるような家庭や、助けを求めている微弱な声を聞き取ることが出来て、助けることが出来るだろう。

### 3. 子ども食堂が予示、啓示する新しい社会の在り方

これまで述べてきたように子ども食堂は社会に対して様々な影響を与えることが出来る。

これは社会が変化していく中で足りない部分が生じてきてそれを補おうとする為に社会が子ども食堂を生み出したと考えることが出来る。

かつての日本社会は、地域のコミュニティが強かった。学校は必ず出席し、家族は皆に世帯以上住んでいる家が多かった。近所付き合いも盛んで、お互いの隣の家の軽い家庭環境は把握しているくらいであった。お互いを監視し、何か他の家のことや地域に利益に背くようなことをしていたら悪い噂がすぐその地域中に触れ回るような環境だった。だから子どもを安心して他の家が近所だけの他人に預けることが出来たのだ。このように自分たちで地域を作り、地域を守り動かしていく仕組みになっていた。しかし社会は変化していく。互いを監視し合うことが祟ってか、地域住民は互いに興味をなくして関わらなくなってきた。女性の社会進出により、常時家にいる人々がいなくなった。それにより婦人会などの地域の集まりがなくなってしまった。それは日本の教育に関する費用が高くなったり景気が悪くなり子どもを一人育てることに昔よりお金がかかるようになってしまった。そうして皆より個人、人のプライベートに踏み入るのは失礼であるという考えになった。それは子どもにとって良い変化とはいえなかった。これまで教育や育児を行ってきた母親が社会進出してしまった。さらに地域の繋がりも無くなり子どもを預けられる場所がなくなってきている。子どもを育てるためのお金を稼ぐのが精一杯でその中身まで考える余裕がなくなってしまった。子どもは産み落とされてから受け皿の上で大切に育てているのではなく、宙ぶらりんになったまま大きくなっていくような形が出来てしまったこと。女性が社会進出を始めても社会は女性に育児を行わせようとするように男性には働けと言わんばかりに

社会の雇用関係は変わらないことが主な要因としてあげることが出来る。結果、子ども達の周りには強いコミュニティとそのほか他人という形が出来てしまった。

それが及ぼす悪影響を心配して一部のお節介な大人達が子ども食堂を作っていたのではないか。自分たちの幼少期と現在の子ども達を比べて、足りない、しかしそれによって作られて支えられてきたものの欠落を感じた。それは互いを思いやる行動や子どもを見守る環境や家族団らんの暖かみであり、それをなくしては育てられないと教えられてきたからだ。子は親に似ると言われるように身近な人を見て学習しながら育っていくため、その教はあながち間違っていないと考える。そうであるならば、家に帰って誰もいなく、身近な大人がいない子ども達に品位や常識を学ばせる場がなくなってしまう。そうした子どもが増えると日本はだめになってしまうと感じるのも当然である。そのため、子ども食堂という場で足りないものを補おうとしていると私は考える。

子ども食堂は一度に多くの子どもや家族が集まるため周りと自分を比較し、その常に合わせることにより常識が備わる。また、多くの子ども達や大人との関わる機会になり、関わることにより人の温かみを感じる事が出来る。さらに学校や家族ほど強い繋がりで構成されているわけでもないので通いやすく、子どものストレスになりにくくケアの役割を果たしている。大人や地域にとっても情報交換の場になるため失われた婦人会や町内会といったコミュニティの役割を再現している。それは親にとって育児の仲間を増やし、多忙で苦勞の多い育児と仕事の両立の助けになるだろう。その他の地域住民は普段ふれあわない子どもに刺激を貰えより生きがいを持って生活することが出来る。

子ども食堂が出現、急増している社会に対してのメッセージは社会の変化に子どものケアが進んでいないという管理主体に対するメッセージであり、さらなる社会の変化を促す危険信号でもある。と同時に個人に分かれていた繋がりのない社会から子ども食堂というそれらを結ぶ線が出来た、地域社会のコミュニティが強くなりつつあるという希望の光でもある。

#### 4.子ども食堂もつ潜在的な可能性

子ども食堂は地域の中で各家庭をつなぎ地域社会を強くする効果がある。これがもし特に少子化が激しい地域や貧困家庭が多い地域、高齢化が激しく進んでいる地域などに普及し、その役割を全うすることが出来たなら日本の社会が一気に活気が出てきて強くなるだろう。子どもが自ら居場所をつかみ十分な教育、食育、徳を積み上げることが出来て日本の未来は間違いなく明るくなる。しかし子ども食堂にはもっと可能性がある。それは地域の情報交換の場と、新しい意見を求める江戸時代で言うところの惣のような形になればなお良いと感じる。惣とは、百姓の村におけり自治的な組織でその中で村の方針などを決めていた。子ども食堂にももっと地域の話し合いの場のようなものをもうけた方が良いと感じる。多くの子ども食堂は貧困家庭の子どもを助けたいと銘打っておきながらなかなか行動に移せていない。それは子ども食堂の存在を知ることが出来ない貧困家庭が多いからだ。貧困家庭は周りのコミュニティから離れていることが多くそのため情報収集力も低い。周りの雰囲気にもなんとなく合わないため端から見ても関わりにくい家庭である。しかし、小学校や中学校が義務教育になっているので、子どもから何らかの情報は聞いていても目をつぶっていたのではないか。一人ではどうしても関わる勇気が持てなかったとしても、皆が集ま

り、話題をそのような家庭に挙げることで半ば強制的に認知せざるを得なくなり救いの手が差し伸べられるようになる。さらにそういえば〇〇さん家ちょっとやばくない。や、〇〇さんのお子さんちょっと虐待されてない。などの普段は愚痴に聞こえる話も子ども食堂で行うことによってじゃあちょっと声をかけてみようとか、様子をしっかり見ておこうという用法公への転換が起こるに違いない。それによって子どもの命が救えたり、また、地域内で解決することによって親が犯罪者にならずに救われたりするかもしれない。

子ども食堂は普段では関わりづらい家庭を差し伸べ、普段聞こえないような弱いすくいを求める声に気づけ対処できる力を持つ仏の手のようなものになれると考える。さらにこの日本人を、日本を、自ら冷たい社会と卑屈に語るような意識を変え、日本に住む人々は日本に住んでいることを誇りに思い、未来に希望をみて進んでいけるような社会にする力を子ども食堂は持っているとは私は考える。